

瑩祖の扱法眼

光 地 英 学

題名の扱法眼は、宗師の見識というのが通常の意味であるが、ここでは瑩祖（瑩山紹瑾禪師）その人の器局の偉大性と、学殖識見の豊かさ（つまり学徳）とを意味する。このことに依って、太祖の人物とその学を究尽するというのではなく、拙子の当稿はただその一端に触れているというに過ぎない。なお本山版『常済大師全集』所載のものを以て、瑩祖撰と肯認しての立論であることを断わっておく。

一、高德性

(1) 先ず靈夢をみる。瑩祖ほど靈瑞夢をみた祖師は稀有であろう。『洞谷記』に依り、靈夢を概ね二類型としてみることにする。先ず所動的靈夢について記述することにした。

(1) 正和元年（一一三二）春、能州（石川県能登）賀島郡（羽咋郡）酒井保、中河に、同地頭、酒勾八郎頼親の嫡女、海野三郎滋野信直夫妻の施与に依り、永光寺を開創す

るのであるが、その施与の夜の靈夢について次の如き記載がある。「予寄宿檀主亭、中河引地、感夢、見化寺諸堂、及門前掛鞋之大榎樹、而知衲僧可還草鞋錢、勝地。納受此地、以欲為生涯幽棲之寂靜処。即ち永光寺を以て、瑩祖晚年隱棲終焉の地と為し度いというのである。

(2) 正和二年八月、同じく永光寺についてであるが、茅屋を結んで仮の庫裡となした。その夜、靈夢を感じた。十六羅漢の第八尊者が次の如く告げた。「入山看山、眺望此山者、雖為小處、頗為勝地、尚勝于永平寺」。後、元応二年（一一三三）除夜小参の項に次の如くである。「憶夫、始縛茅屋時、十六羅漢内、第八伐闍羅弗多羅尊者、来於山中而入夢。看山熟視、告瑾上座曰、当山雖為小所、頗為勝地、不當障礙神所居、興化門事、如願成就」。〔大本山総持寺蔵版『常済大師全集』所収、「瑩山瑾禪師語録拾遺」にも同文記載）。第八尊者の懸記ともいう

べき夢告であつて、敢えて説明を俟つまでもないであらう。

(3) 文保元年（一一三二）安居中の夢に、当国とあるから酒井保か、又は賀島郡かであろうが、その守護神が来て「一國告報、供_ニ加菜一種_ニ」と。瑩祖は「是大鎮守、一宮之冥報」としている。守護神への献供ではなく、却つて守護神に依る瑩祖への献供とみられる。

(4) 文保二年秋頃、達磨大師が夢中に出現され、大師の座下の名の間から出ずる清水に浴せしめられた。又、弥勒菩薩が夢に現じて青蓮華台の座を与えられた。更に夢中、釈尊の宝積経の時解脱・心解脱・事解脱の三解脱門を説くのを観得した。まことに珍貴ともいふべき神秘性である。と云わねばならない。

(5) 元亨元年（一一三二）二月四日、宝積経を見ている時の坐睡時の霊夢は次の如くである。「経文曰、不_レ厭_ニ捨癡惑_ニ、不_レ樂_ニ欲智恵_ニ。不断煩惱得涅槃ではなく、煩惱涅槃の何れをも包越した絶対境に他ならない。

(6) 同年十二月廿二日の夢の中で、永平寺演老に代つて上堂して曰うのに、「消残、一盞燈、独朗_ニ簾箔、影不_レ出_レ山、将二十年。下座次、予曰、和尚在不_レ出_レ山願_ニ歟。演曰、然。可_レ喜、千万人中、汝独知_ニ我心中_ニ。この夢を以て、太祖は世間に対する愛念を抑え、当永光寺に幽棲すること

の吉兆となしている。

(7) 元亨二年正月廿七日、夢の告げに曰くとして、「古登新_ニ与利、八幡能神乃、安羅和礼転、我立曾満乃、守登南流加_ナ南」。八幡神宮の神が出現されて、今年より瑩祖の立つ_ニ杣_ニ、つまり瑩祖の発願所行が完きものとなるという告のよう_ニに看取される。

(8) 元亨三年六月四日、夢の中で瑩祖が次の如く詠じた。「我栖妙冬、那坂野山裳、不美那羅志、苔乃下帰転、人曾_ニ問来」。この夢の中の歌詠に依つて、子孫（法孫）が絶えず、道人が相続し、寺門繁栄、仏法断絶しないと瑩祖が記載されている。

(9) 同年八月十五日、戒法を明孤峯に許すとある。この明孤峯は孤峯覚明師のことと思われるが、それに続いて「有_ニ感夢_ニ」とある。この夢の内容については説述がないから知る由もないが、感夢として記録されている点、瑞夢であると思われる。

(10) 同年十月廿四日夜、感夢があつた。それは新法堂の正面が三階になつていて、その座上で説法して後、そこより降りて地に立った。その時、無涯智洪、明峰素哲等が身をかがめて合掌低頭した。瑩祖はその時「正法眼開明、法堂大開、識得人人不_レ立_ニ階梯_ニ」と説法している。正法に対する法眼が開明、仏果円成というのであらう。

(1) 正中二年(一二三二)七月十六日「感瑞夢」曰」として、次の記載がある。「或人一尺余計深箱、在清水。水上如金鈎文字浮。云、室岩殿斗谷同清流也」。かかる感夢から覚めて後、「室少室也、岩殿石頭也、斗谷洞谷也。三人知不別、同清流、是吉徴也」とし、吉瑞の夢として感受している。少室は達摩大師、石頭は石頭希遷禪師、洞谷は瑩祖で、この三人は別ではなく、同心一如にして、清浄な法水そのものであり、吉徴であるというのである。以上が、瑩祖の予期しない自発的でない、つまり所動的な夢であるのに対し、次は瑩祖の自ら靈夢を感ずるよう念願した、つまり能動的な瑞夢をみる。

(1) 正中二年五月廿三日、生生世世、菩提心の護持と女人濟度の願の護持を念願、その二願が仏意に叶わば靈夢を感じるようにと感念して打眠。その夜明け方、次の靈夢を感じた。太祖が旧くから所持していた袈裟で被著しないままのものがあつた。それを今塔著しようと披いてみるに、鼠の糞や牛糞馬糞及び馬や人の毛等が付着するという如く、不浄の塵穢で汚染していた。それでそれらを打振り捨てた。著用した。かく夢の内容を記述して後、瑩祖は「誠奇夢、瑞夢、本願新成、瑞相也。仏祖感応、証明兩願也」と感銘の程を吐露している。かかる感夢の内容からしての感歎文は、むしろ奇異にすら思われるが、それは罪禍、煩

悩障の消除されることに依り、二願領納の仏意の意外であると、瑩祖が看取されたものとみられる。

(二) 『瑩山清規』に見られる日中・月中・年中の三大区分と、仏涅槃會・降誕會・成道會・達磨忌、特に大般若・大布薩・羅漢講式・楞嚴會・施餓鬼會等の開示・記述が特筆せられねばならない重要性を帯びている。

(三) 多数の開創寺院と門弟。開創寺院としては、永光寺(永光寺内として、円通院・伝燈院―伝燈院は現在金沢市鷺町に―)・総持寺・城満(万)寺・宝応寺(現在無し)・光孝寺(現在無し)・浄住寺・放生寺。

五老峰の創建。

得法の門弟として、明峰素哲・峨山紹碩・無涯智洪・壺庵至簡・珍山源照。

尼弟子として、黙譜祖忍・金灯慧球・明照・忍戒。

伝戒の弟子として、鉄鏡眼可・月菴瑛瑛・尊道・素溪・子敬・承順・慶道・道可等。孤峯覚明は太祖に就いて修行しにのではあるが、そして六兄弟の一とされてもいるが(洞谷記)、臨濟系の嗣法とみられる。

なお卅一才にして既に僧俗七十余人を得度せしめている(洞谷記)。有力な信徒として次の如きがある。細川刑部大輔頼春の属将、阿波国海部郡司、信州海野三郎滋野信直夫妻、富樫家尚、同家方、中田右馬尉、駿河法眼定審、藤原四

郎、得田某（羽咋郡徳田保の地頭職）、金吾朝定等。

二、学殖識見

ここに云う学殖識見は、単なる学的素養というに止まらず、学的力量も含め、行的基盤に立った全人的見識という意味である。

(一)『伝光録』

(1)第一章、摩訶迦葉尊者章に、「多子塔前にして、初て世尊に値ひたてまつる。世尊善来比丘とのたまふに、鬚髪すみやかに落ち袈裟体に掛る。乃ち正法眼蔵を以て付嘱し」とある。この章にてこの文の後に、靈山会上拈華微笑が出てゐるが、そのことに遡って、すでに多子塔前の初相見に仏心相承が本質的に成就していたとされている。

(2)第二章、阿難陀尊者章の最後部に、迦葉尊者が阿難に、「倒却利竿を倒却著せよ」と命じた。そのことに就いて瑩祖は、利竿の倒却を各自の煩惱解脱、悟道に摂入結歸すると独自の説明をなしている。

(3)第十九章、鳩摩羅多尊者章で、鳩摩羅多師の発得した宿命智を以て六神通の一とせず、心の本源を明らかにする、即ち大悟大徹そのものであるとなしている。

(4)第二十一章、婆修盤頭尊者章に、瑩祖は「心に願ふ所なき、之を名て道と謂ふ」となす。即ち有所得心のないところを以て道としている。仏道を会得しようと思つて、一切の功徳を重ねても、為にせんとするならば、悉く無駄である。これこそ学道の秘訣であるとなすのである。

(5)第三十四章、青原行思禅師章に、仏性を見る、本性を見るということについて、「見聞に依らず境智を縁せざる時、試に其下を見よ、必ず惶惶として人に問はざる智あり、覺せず証契することあらん」と。いう如く、見聞覚知も本心の現われではあるが、そのことをよく体認するには、一先ず現在の見聞覚知や主客相對の働きをなさないで、よくよく自己自心を顧みよ。図らずも、他の人から与えられたりすることのない本来具有の智慧があることに、必ず目覚めることがあるであらう、と。

(6)第三十九章、洞山良价禅師章に、洞山と靈巖曇晟との無情説法に於いて悟道を提示している。洞山はこの問答後、過水悟道しているから、この無情説法にては過程的覺悟に過ぎないので、悟道の結着ではない。然も問答にて究極性を認容するのは、師資間、以心伝心、面授悟道の尊さを昂揚したものであるとみられる。

(二)『信心銘拈提』

(1)「斯道至哉、無難無易」。これは『信心銘』（以下、銘と略称）の積であつて、『銘』では、至道が難無しとのみあるが、『信心銘拈提』（以下、拈提と略称）では、難易

何れも離却するとしている。

(2) 「三世諸仏、六代祖宗、有覺無覺、理性玄妙、仏法奇特、三界競起、十方所現、皆是無_レ不_レ妄」。これは『銘』の「前空轉變、皆由_レ妄見」の積中のものである。即ち、三世の諸仏や、達摩大師より六祖慧能師に至る六代の祖師、そして又、悟りをひらいたもの、悟りをひらかないもの、心性即ち心の本性の幽玄微妙なこと、仏法の殊に優れていること、それに欲色無色の三界に競い起る六道四生の苦樂昇沈、其他、十方世界の総ての現われ等、これらみな心内の妙有のすがたである。と、このように太祖は現象界の真空妙有に止まらず、一歩進んで、心内のそのあることを示唆している。

(3) 『銘』の「一心不生、方法無咎」に対する『拈提』の積中、「心豈不_レ方法」とし、『銘』の一心が衆生の染汚心であるのに対し、『拈提』のそれは不染汚清浄心となしている。

(4) 『銘』の「小見狐疑、転急転遲」の、『拈提』の積中、「願_レ仏道者、恒時可_レ願、不可_レ限_レ百劫千劫」。三世諸仏、長劫修行、猶未_レ休。虚空縦有_レ尽、仏行無_レ退転。説_レ三祇百大劫、説_レ仏行一時二時。而仏道一生欲_レ極小見、甚可_レ笑」と断言している。これは仏道が無限無間断の修行であることを説破したので、実に曹洞禅の本領を開示した

ものというべきである。

(5) 『銘』の「將_レ心用_レ心、豈非_レ大錯」の『拈提』中、「伯牙若無_レ子期、未_レ彈_レ琴」とある。伯牙は能く琴を弾ずる人、子期はその親友で、真に能く伯牙の琴を聞いた人であった。子期が死んだ後、伯牙は琴を破り棄てて、再び琴を弾じなかった。これは『呂氏春秋』卷十三の次の如き故事に依っている。「伯牙琴を鼓く、鐘子期之を聴く。方に琴を鼓いて、志し、太山に在り。鐘子期曰く、善い哉、琴を鼓く、巍巍として太山の若しと、少しく選_レうの間、志し流水に在りと。鐘子期又曰く、善い哉、琴を鼓く、湯湯として流水の若しと。鐘子期死す。伯牙琴を破り絃を絶ち、終身復、琴を鼓かず」。〔原漢文〕「永平、知事清規」監院頃に、「呂氏春秋に曰く」とあるが、それは「堯、許由を沛沢の中より朝せしめ、云云」〔原漢文〕で上記とは異っている。従って瑩祖の当『呂氏春秋』は、『永規』よりのものではなくして、『呂氏春秋』の原文そのものを閲読されていたことの証とされ得るであろう。

(6) 『銘』の「契心平等、所作俱息」の『拈提』中、「内無_レ繫蟻糸」とある。この繫蟻糸の正確な故事は、今のところ詳かではないが、一応次の『蘇東坡詩集』卷九、祥符寺九曲觀灯の註に求められる。同註には、次の如き記載がある。「宝珠蟻を穿つ、小説に載す。九曲の宝珠を以て、

之を穿たんと欲して得ざる有り。之を孔子に問う、孔子教うるに、脂を線に塗り、蟻をして通らしむるを以てす。唐、揚濤が、蟻九曲の珠を穿つ賦に、蟻質と為りて微渺、珠竅って虚円なり、苟くも一縷にして是れを繋ぐ、九曲なりと雖も、穿つべし。（原漢文）。

(7) 『銘』の「泯其所以、不可方比」の『拈提』中、「壺中天地乾坤外」とある。この語は、中国隋代の費長房が或る仙人に誘われて、その仙人の携えている壺の中に入った。中には立派な御殿があつて色々な馳走があり、その饗応を受けたという故事である。このことは『後漢書』卷八二下、方術列伝七二の記載で、それは次の如くである。

「費長房は汝南の人なり。曾て市掾為り、市中に老翁の売薬するもの有り、一壺を肆頭に懸く。市罷に及び、輒壺中に跳入す。市人之を見るもの莫し、唯長房のみ楼上より之を覩て異めり。因つて往いて再拜して、酒脯を奉る。翁長房の意、其の神を知るや、之に謂いて曰く、子明日更に来るべしと。長房旦日復翁に詣る、翁乃ち与俱に壺中に入る。唯玉堂殿麗なるを見る。旨酒甘肴其の中に盈衍す、共に飲み畢つて出づ。（後略）」（原漢文）。この『後漢書』を、瑩祖がすでに閲読していられたものと看取される。

(三) 『瑩山清規』

(1) 月中行事、菩薩戒布薩式に、「皇帝陛下、聖化無疆、

王公百官、文武万姓、同成桃李之蹊、皆守葵藿之節」とある。この「葵藿之節」は、月まわりが日光の方に傾き向う、そのように、君主又は長上を尊敬し忠誠を尽くす意で、道元高祖、少年時有縁の『李嶠雜咏』乾象部十首、日の頃の次の語に拠っているものである。「心を傾くることは、葵藿に比し、朝夕堯曦に奉ず」。（原漢文）

(2) 同『瑩規』羅漢供養式の散華の喝文、「天地此界多聞室、逝宮天処十方無、丈夫牛王大沙門、尋地山林遍無等」は、『阿毘達磨俱舍論』卷十八、分別業品四之六のうちの文である。

(3) 右同『瑩規』羅漢講式に、「三藏十二之典、五明四章之論、（中略）法住記曰」とある。いうまでもなく四章は四吠陀のことであり、「法住記」は、具名「大阿羅漢難提蜜多羅所說法住記」で、仏御入滅後、八百年中に、勝師子国勝王都に出世した難提蜜多羅の所述のもので、十六羅漢の住世護法等を記した注目すべき典籍である。

(4) 羅漢講式に、「自迦葉形遁雞足、阿難身分恒河」とある。この「阿難身分恒河」とは、阿難尊者が入滅せんとして摩竭陀国を去り吠舍釐城に赴く。そして恒河を渡る為に舟に乗り中流に泛んだ。摩竭陀王は尊者の去るのを聞き、その徳を慕い、兵を率いて後を追った。吠舍釐王も亦、尊者の来るのを聞き、喜びに充ち、軍を以て迎える態

勢を整えた。ために両軍相対することとなった。阿難尊者は両方の兵の互いに殺害することを恐れ、舟中より起って虚空に上昇し、神変を現じて自ら火を発し身を焚き、身体を二分して兩岸に落とした。二国の王は各一分を得、軍を挙げて慟哭し、後、各舍利を奉じて本国に塔を建てた、そのことである。これは『大唐西域記』巻九、摩伽陀国下の阿難陀尊者項の次の文に拠っている。「昔尊者將に寂滅せんとし、摩竭陀国を去って吠舍釐城に趣く。兩國交争して兵甲を興さんとす。尊者傷慙して遂に其身を分つ」。(原漢文)

(5) 永平道元和尚追恩の、次の如き疏文がある。「密かに惟みれば、洞水、逆流して、巨海の流濤、雷をなし、黄竜、雷、激して、普天の雲雨、潤おいをなす。曹源の一滴、点著して、派流、繁興し、二株の嫩桂ぜんけい、覆蔭して枝条鬱茂す。五家の家風、通ぜずということなく、七宗の宗要、悉くみな達す。和漢兩朝の名匠に遍参し、内外、顯密の經教を博覧す。百世の英傑、千古の模範、わが扶桑の芸祖永平開山和尚なる者か。第一天を照して、日月よりも明かなる眼目あり。大千を触破し、て輪宝より妙なる法輪を転ず」。

(原漢文、以下同)

(6) 高祖讚仰疏文、そして又、次の九月十五日、徹通忌の疏文等、瑩祖の文才、豊かなる学識、洵に敬仰の他はな

い。即ち「密かに惟みれば、雲居の懸記、来際に弘通して今に長じ、偃溪の遠識、宗風を興起して古ならず。一実知見の正眼を開明して、一切不為の三昧に安住す。節儉、己に克って芙蓉九代の法味を甘ない、陰徳を他に蒙むらしめて、日域、普照の伝灯を挑ぐ。大陽、目に溢る。誰ありてか疑著せん。大乘の運載、物として起超することなし」。就中、「偃溪の遠識云々」など、瞠目底の文字であると云い得る。

(7) 更に十月五日達磨忌の疏文のうち、特に「右、伏して以みれば……謹しんで疏」に至るまでの文は、刮目すべき雄文である。のみならず、その間に散見する学識の卓越さについては、瑩祖の時代を考慮してみた場合、驚嘆の他はない。そのうちの若干を次に例示してみる。「白馬、始めて漢朝の瑞を先とし」「虬文を翻訳し、經教を流通す」「老蕭の丹臆に契わずして、潜かに魏邦に之く」「撰斎北面の勤めを忘れんや」「玄沙の鈎を下して、曾て魚を得匡し」「北欠の宝祚の無疆を祝し、雲は鶴の如く、雨は膏の如くにして、南畝の黎元の有歳を資せん」。

以上は瑩祖の学殖識見の総てでないことはいうまでもない。それら及び『瑩山清規』の疏・回向文も含め、尊敬の念を以て、その単なる一端に触れたに過ぎない。

三、超邁性

瑩祖の靈夢に就いては既掲のところであるが、靈夢ともみられるし、又、覚醒時の肉眼・心眼に映現したようにも看取されるものに次の如きがある。

(1) 『洞谷記』に文保元年（一三二七）冬に、「迦羅天来、給仕望之」。又『瑩山清規』月中行事十五日のところに、元応元年（一三二九）九月十五日とし、次いで「始修羅漢供、每十五日供養之。是尊者望也」（一本、この文無し）としてある。この文の割註に「羅漢示現来对瑩山自請故」（一本に無し）とあるのがそれに他ならない。『洞谷記』文保二年九月十五日の項にも、この点、「始羅漢供、而每月十五日供養之、尊者望也」とある。

(2) 同じく『洞谷記』にはあるが、靈夢に次いで幽体離脱ともみられるものがある。文保二年（一三二八）秋の頃の靈夢に、「弥勒入夢、与青蓮華台座」とある。ここ迄が夢であることは間違いない、問題はその語に続いての次の文である。「転生三生、而接引飛空、諸天作妓樂、奉送弥勒前。導而参兜率内院、至不退転位」。夢の続きの文であるから、同じく夢中のこととして理解する方が妥当であると思われる。それは単なる夢ではなくして、夢中の幽体離脱か、又は夢中ではなく覚醒時、現身にての幽

体離脱であるときれねばならない。この離魂の觀を更に強化しているのに『瑩山瑾禪師語録拾遺』の次の文がある。

「老僧十九歳時、不死生兜率天、登不退転位、忝連五十四世法孫」。十九才時というのであるから弘安九年（一二八六）となる。前記の靈夢は文保二年（一三二八）であるから、五十一才頃となって異時のこととなる。何れにしても尊貴な神秘体験といふべきであろう。

(3) 瑩祖の前生とし、更に本来身として同『洞谷記』の記述に注目したい。即ち「予昔從毘婆尸仏時、証羅漢果。須弥山北、雪山住。鳩婆羅樹神也」「自証果已来、五百生来、興法利生現身也」。

これはかの法然上人が、臨終に近く、己が前生の、舍利弗尊者であったことの述懐とも相通するものがあり、禪師その人の超邁性の一端に触れるものとして、感銘一入の余韻、寔に尽きないものがあるとされ得るではなからうか。

四、結び

上述の高徳性・学殖識見・超邁性は、瑩祖の全貌でないことはいふまでもない。のみならず、九牛の一毛ともいふべく、禪師その人の僅かな一端に触れたのに過ぎない。ただ永平高祖とともに、両祖の一という尊貴性に立っての、太祖瑩山の一面目觀に他ならない、ことは最初の寸言の通りである。